

関西学院千里国際高等部

高い国際通用性を有する レジリエンスに富むグローバルリーダー育成

【構想の概要】

- 本校創立以来展開してきた探究型学習の進化形である「知の探究」「リサーチとフィールドスタディ」という科目を新設し、SGU 関西学院大学との高大連携、フィールドスタディなどを通じて課題研究を進め、その成果を研究論文にまとめ発表するプログラムを開発・実践し、高い国際通用性を有するレジリエンスに富むグローバルリーダーを育成する。
- 文部科学省委託「国際バカロレアの趣旨を踏まえた教育の推進に関する調査研究」における本校の成果を踏まえつつ、世界水準の学びとして日本語 DP による IB ディプロマ及びサーティフィケート取得を可能とした教育プログラムを開発・実践する。
- 全校生徒が SGH 対象生徒である。

スクールミッション

Informed, caring, creative individuals contributing to a global community
知識と思いやりを持ち、創造力を駆使して世界に貢献する個人を育む。

高等部のテーマは「レジリエンスに富むグローバルリーダーとしての自覚」

- ・ 自己自身への深い理解：リフレクション
- ・ 他者との確かなコミュニケーションを築く力：発表・ピアレビュー
- ・ 課題・状況を肯定的にとらえ未来を展望する力：グローバル課題への挑戦
- ・ 課題解決に真摯に取り組む力：一年間の個人での課題研究継続



教育課程表(一部)

(2018 年度以降入学生、全ての教科において SGH との関連はあるが、中心的に関わりのある部分のみを抜粋した。)

教科	科目	単位数	
		必修	選択
総合的な学習の時間	以下から選択必修	3	1~3
	SGH	3	
	キッキング総合・基道	(1)	1
	文化研究	(1)	1~
	高大連携科目・他	(1~3)	1~3

※ 卒業認定単位 74 単位

※ () は教科内での選択必修科目

教育課程表や時間割上の工夫

SGH 関連科目に限らず、本校は学期完結制を導入し、生徒個別の興味に対応できる仕組み作りをしている。夏季・秋期どちらに開催のフィールドスタディを選択しても、その直後の学期に論文を書く科目（「リサーチとフィールドスタディ」「課題研究論文」）が複数開講されているため、最善の時期に履修が可能になっている。また、英語で論文を書くことを希望する生徒に対応した「リサーチとフィールドスタディ E」も選択可能になっている。

教員側の視点からみても、フィールドスタディの開催時期を夏季・秋期と分散させることで、教員の業務のバランスを調整でき、多様な教員が企画引率へ参画しやすくなっている。

生徒の授業登録により、IB 科目は IB Physics（日本語）、IB English（英語）の Certificate を得ることが可能になる。IBDP Candidate になることも可能な仕組み作りを行なっている。

学校設定教科・科目の設定と運用

総合探究科の科目として表 1 に示した 4 種を設定している。担当教員の所属については同表の通りである。いずれも SGH 主任がリーダーシップをとっており、「知の探究」以外では SGH 主任が毎年の校内ヒアリングの結果まとめたカリキュラム・標準指導案を基に議論し、その都度発展させながら、各担当教員の得意分野を生かして運用している。論文評価は生徒も自己評価するループリックで行われ、調整のための会議も持たれる。「知の探究」では、年度始めに担当全員で過年度を振り返り目標設定をし、カリキュラムデザインを行っている。

表 1. 学校設定科目・活動と担当教員所属内訳

学校設定科目・活動	担当教員所属（2017 年度）
知の探究（科目）	SGH、英語 Native、理科、国語
フィールドスタディ（活動）	SGH、社会、保健体育、情報、英語、理科、司書
フィールドスタディ J/E（科目）	SGH、司書、理科、社会、英語 Native（E）
課題研究論文（科目）	SGH、国語、司書、英語

教科間の連携・意識

SGH に関する事柄を担当する SGH 委員会は管理職、教務部長 / 数学、司書、SGH 主任、事務職 2 名で構成されている。教科間の連携は週次授業担当者会議で行われるほか、2018 年度から「総合探究科」に所属する社会・国語・情報・SGH の教員で学年を超えた探究型学習授業間の連携を図っている。

また、全ての常勤教員が、生徒の課題研究を支援する「メンター」となるため、スキル向上のためメンターワークショップを開催して、課題研究で用いる教科書を共有することにより、各教科の授業で課題研究に関わるスキルを養う機会を模索し、可能な限り実施をしている。特に、元々レポート課題を出していた科目は比較的早期に連携が可能になった。

成果や課題とエビデンス

成果としては、本校の特性を生かしたカリキュラムや、全ての教員が課題研究支援に寄与できる体制ができたことが挙げられる。一方で、課題研究には生徒の発達段階に合わせたきめ細やかな指導が必要であり、その点は今後も課題である。また、本体制の効率を上げていくことも求められている。ここで鍵となるのが、レジリエンス研究である。生徒のレジリエンスの変化を見るため、心理学的尺度を組み合わせ、エビデンスとなるデータ（量・質）を収集して年次報告をしているが、その活用方法を更に具体化していくことは今後の課題と言える。

高大連携・他校への普及・特色ある取り組み

高大連携は SGU 関西学院大学を中心になされ、フィールドスタディ前に生徒全員が大学教員の専門を生かした講義を受けたり、大学生のゼミとの合同ゼミに参加したりするなど、様々な機会を提供している。普及は、成果報告会、他校も参加する発表会などへの参加を通して行っている。また、特色ある取り組みにもなるが、併設の関西学院大阪インターナショナルスクールの教員と調整し、本校の生徒が小学生に発表について教えたり、逆に小学生のポスター発表会に参加したりする機会も生まれている。